

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	文学論 : ジョイスと漱石
Author(s)	高橋, 渡
Citation	英語英文學研究 , 67 : 1 - 17
Issue Date	2023-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/54577
URL	https://doi.org/10.15027/54577
Right	著作権は, 執筆者本人と広島大学英文学会に帰属するものとします。
Relation	



特別寄稿

文学論——ジョイスと漱石

高橋 渡

はじめに

本論は、日本英文学会中国四国支部 2022 年度大会の特別講演で話した内容を縮小・改訂したものである。特別講演では論文や研究発表などでは扱いにくい題材を取上げて取り上げ、私個人の思想や文学観が反映している。それ故論文としては必ずしも適切な内容になり得ない旨最初にお断りしておく。

タイトルのジョイスと漱石だが、この組み合わせも些か恣意的なものと言わざるを得ない。筆者が好み、影響を受けた作家であると言うのが、この二人の作家を取り上げた根底にはあるのだが、もしそれ以外に二人を結びつける蓋然性があるのだとしたら、それは、両者ともにそれぞれが置かれた歴史的状況の中で、その流れに抗い苦闘した作家であったと言うことが出来るかも知れない。

ジョイスはアイルランド独立運動の中ナショナリズムが高揚した時代、一方、漱石は明治維新と言う日本社会の変革の時代を生き、共にその歴史的状況の中でもがきながら小説を書き続けた作家だった。このような文脈の中で、この二人の作家について語りたいと思う。そして、それは同時に筆者自身の文学観を示すことになるだろう。

ジョイスについては主要作品である『ユリシーズ』を取り上げるが、到底限られた紙面で語りつくすことは出来ない。ここでは、本論の趣旨に沿った問題の一部を語るに留めなくてはならない。また、漱石に関しても、十分に作品分析を行う余裕はないので問題を絞って概略を示す他はない。その点についても併せてお断りしておく。

ジョイスの生きた時代

まず、ジョイスが生まれ育った時代のアイルランドの歴史について少し触れておく。アイルランドは長年英国の支配を受け、正式には 1800 年に併合法が成立し、翌 1801 年に英国の一部となった。1845 年から 48 年にかけてのジャガイモの大飢饉の際には約 800 万人いた人口が 400 万人に半減する。百数十万人が餓死し、200 万人以上のアイルランド人がアメリカをはじめ海外に移住した。その際、時の英国首相グラッド・ストーンはアイルランドからの穀物輸入を禁止する法案を議会で提出したが否決され、結局英国はアイルランドを見殺しにする結果となっ

た。それを機にアイルランドではナショナリズムが高揚し、英国からの独立運動が盛んになる。その後、1916年の復活祭蜂起などを経て、1921年にアイルランド自由国として自治権を獲得することになる。ジョイスは1882年生まれだが、彼が生まれ育ったのは、このようにナショナリズムが高揚した時代だった。文学においても、ジョイスが文筆活動を始めた頃のアイルランドでは、イエイツなどを中心とした「アイルランド文芸復興運動」が文壇の中心となり、その他、殆ど死語となっていたアイルランド語を復活させようとする“Irish league”など、ケルト文化を復活させようとする運動が盛んになっていた。ジョイスはこのようなナショナリズムに与することはなかった。例えば、やはりイエイツなどによって設立された“Irish National Theatre”の民族主義を批判する“The Day of Rabblement”をユニヴァーシティー・カレッジ時代に書くが、大学の雑誌に掲載を拒否され、自費出版せざるを得なくなる。

もう一つ、ジョイスが抱えていた歴史的・文化的背景はカトリズムである。アイルランドは5世紀にSt. Patrickがアイルランドにカトリズムを布教して以来敬虔なカトリック信仰の国となり、カトリック教会の影響は多大なものがあった。ジョイス自身、イエズス会系のクロンゴーズ・ウッド・カレッジ、ベルヴィディア・カレッジに学び、宗教教育を受け、司祭にならないかと誘いを受けたが、“non serviam”（「我仕えず」*Portrait*, 103）と言って断る。ジョイスはカトリック信仰を精神の桎梏と捉え、それを拒否するのである。

ナショナリズムとカトリックが支配するアイルランドには最早ジョイスの居場所はなくなる。ジョイスは結局大学卒業後大陸に渡り、生涯母国から離れた場所で執筆活動することになるが、一貫してダブリンを舞台としてアイルランドのことを書き続けた。

『ユリシーズ』について

それでは、『ユリシーズ』について語ろうと思うが、先にも述べたようにこの作品の特徴の一部について、極簡単に触れるに留めざるを得ない。

まず、『ユリシーズ』がバフチンの所謂ポリフォニックなテキストだと言う点を指摘しておきたい。『ユリシーズ』からは様々な声が聞こえて来る。主要な3人の登場人物スティーヴン・デダラス、レオポルド・ブルームとその妻のモリーの声你最も詳しく語られるが、その他にも様々な声が聞こえて来る。第12挿話（キュクロプス）では、過激なナショナリスト Michael Cusack をモデルにした「市民」が、ユダヤ人であるブルームを迫害する。また、第13挿話（ナウシカ）では、その「市民」と関係のある父親を持つガーティー・マクダウウェルと言う娘が登場するが、彼女は暴力をふるう父親のもとで育つサバルタンの女性として

描かれている。それから、第1挿話（テレマコス）の、アイルランド支配者階級に属する医学生バック・マリガンや英国人のヘインズ。第2挿話（ネストール）に登場するユニオニストでありまた反ユダヤ主義者のプロテスタント、ディージー校長等々様々な声が聞こえて来るのである。

これらの声は様々な形で互いに絡み合っていて、ミハイル・バフチンが『ドストエフスキーの詩学』で分析したドストエフスキーの作品のように独立した旋律として捉えることが困難だ。例えば、『カラマーゾフの兄弟』では、3兄弟の他、スメルジャコフ、ゾシマ長老など、それぞれが固有の独立した思想を持ち、その一つ一つがそれ自体である意味完結した旋律を形成している。一方、『ユリシーズ』の場合、とりわけ、主人公のブルームとその妻モリーの声は、それ自体単独では明確な意味を持ちえない。ブルームはただの軟弱で、世俗的な人物にしか見えないかも知れないし、モリーにしても、セクシュアルな浮気女のようにしか見えないかも知れない。それらの声は他の声との複雑な関係性の中でこそ意味を帯びてくるように思われる。例えば、バッハの3声のインヴェンションのそれぞれの声部だけを聴いても面白くはないだろうが、3つの声部が見事に結合されることによって素晴らしい音楽になるのと似ているかも知れない。第11挿話（セイレーン）では音楽がモチーフとなり、ジョイスの計画表によれば、「技法」は“Fuga par canonem”（カノンによるフーガ）となっているが、それに象徴されるように、音楽が好きだったジョイスは音楽と言うモチーフを作品全体の構造にも使っていたと考えられる。いわば、この挿話に使われる技法そのものが『ユリシーズ』の或る構造を示すメタ言語となっているということだ。（このような自己言及構造は『ユリシーズ』に顕著な特徴でもある。）

ブルームは朝、妻のモリーに朝食を作ってベッドまで持って行く。これは、当時家父長的な性格の強かったアイルランドの家庭では極めて異例なことと言わなければならない。モリーは歌手で、近々コンサートツアーに出ることになっているが、そのツアーの興行主で伊達男のポイランとこの日の4時に姦通を冒すことになっている。ブルームはそのことを知っているが、それを阻止しようとはしない。ブルームはこの日友人のディグナムの葬式に参列するが、出かける前に、*Leah the Forsaken*（『見捨てられたリア』）と言う劇を見て帰る、と態と婦りが遅くなる旨伝えて家を出る。実際には劇を見ることはなかったのだが、家に早く帰ることを避けて時間をつぶし、最終的にはスティーヴン・デダラスを伴って深夜に帰宅する。つまり、妻が姦通することを知りながら、敢えてそれを阻むことなく容認するのである。

このモリーの姦通問題については、第2挿話でスティーヴン・デダラスが臨時教師を勤める学校のディージー校長の次のような話との繋がりに気付かざるを得

ない。

We have committed many errors and many sins. A woman brought sin into the world. For a woman who was no better than she should be, Helen, the runaway wife of Menelaus, ten years the Greeks made war on Troy. A faithless wife first brought the strangers to our shore here, MacMurrough's wife and her leman, O'Rourke, prince of Breffni. A woman too brought Parnell low. [*Ulysses*, 2: 389~394]

ここでは、3件の姦通問題が提示されている。一つ目は『ユリシーズ』の下敷きとなったホメロスの『オデュッセイア』に先行する『イーリアス』への言及で、メネラーオスの妻ヘレネーをトロイの王子パリスが奪い、それがトロイ戦争を引き起こしたと言う話。二つ目の話には誤りがあり、実際はオロークの妻がデヴォーギラであり、彼女をマクマローが奪い、オロークに攻められ追い立てられたマクマローが英国のノルマン王ヘンリー2世を頼ると言う経緯になる。ヘンリー王は武将ストロングボウをアイルランドに派遣し、ストロングボウは勝利を取めレンスター王となる。そしてこれが英国のアイルランド侵略の契機となったと伝えられている。最後の「一人の女がパーネルを失脚させた」と言うのは、19世紀末のアイルランドの政治家 Charles Stewart Parnell のことで、彼はグラッド・ストーン首相と彼が率いるウィッグ党と連携し、もう少しでアイルランドの自治法案を可決させるところまで行ったのだが、ウィリアム・オシェイ夫人、キャサリン・オシェイとの不倫問題がスキャンダルになり、最終的にはカトリック教会が断罪し、失脚することになる。因みにパーネルを失脚に追い込んだカトリック教会と、それに盲目的に従うアイルランドの民衆をジョイスは強く批判していた。

パーネルの話はともかく、ヘレネーとデヴォーギラの話では、姦通がいずれも戦争を引き起こしていることに注目したいと思う。そして、それとは対照的に、ブルームは妻の姦通に対し報復しようとはしない。この問題は、第12挿話の「市民」などのナショナリストとユダヤ人として迫害を受けるブルームとのやり取りとも深く関わってくる。その箇所を少し引用する。

— What is your nation if I may ask? says the citizen.

— Ireland, says Bloom. I was born here. Ireland. [12:1430-31]

そして、ブルームは、自分はまた「盗み取られ、強奪され、侮辱され、迫害されている民族にも属している。」（“I belong to a race too, says Bloom, that is hated

and persecuted. Also now.” [12:1467]) と述べ、更に次のような会話が続く。

- Are you talking about the new Jerusalem? says the citizen.
- I’m talking about injustice, says Bloom.
- Right, says John Wyse. Stand up to it then with force like men.

[12.1473-5]

それに対しブルームは次のように答える。

- But it’s no use, says he. Force, hatred, history, all that. That’s not life for men and women, insult and hatred. And everybody knows that it’s the very opposite of that that is really life. [12.1481-83]

ここでまず注目しておきたいのは、アイルランドのナショナリストたちが、英国人のヘインズやアングロ・アイアリッシュでプロテスタントのディージー校長と同じく反ユダヤ主義者であり、彼らが弱者であるユダヤ人を迫害するのは、英国が力によって弱者としてのアイルランドを植民地支配により迫害するのとパラレルになっている言うことである。言い換えれば、アイルランドのナショナリストは英国の力による支配を、より弱いユダヤ人に対して反復していると言うことだ。それに対し、ブルームは迫害に力で対抗しようとはしない。それは、力による支配とそれに力で対抗する英国とアイルランドとの血塗られた歴史を否定することになる。ブルームはジョン・ワイズの言う、「男らしく」力で対抗することを拒否する。ブルームは、ジョン・ワイズの所謂「男らしさ」を微塵も持ち合わせていない。しかし、このブルームの言わば「軟弱さ」「男らしくないところ」は、上述したような文脈の中で見ると、血塗られた戦いの歴史に対する痛烈な批判と言う意味を帯びてくる。また、それは同時に、植民地アイルランドの中でさらに弱い立場のサバルタンに対する、ナショナリストの態度への批判ともなる。

第13挿話(ナウシカ)にはガーティー・マクダウウェルと言う若い女性が登場する。ガーティーの父親は酒飲みで、家庭内暴力も振るう男だ。この挿話に描かれるのは女性の世界であり、第12挿話で描かれる、酒と政治と暴力に溢れる男の世界とは対照的である。そのような男の支配する世界で、『ダブリナーズ』に描かれるエヴァリン、そしてこの挿話に登場するガーティーのような弱い立場にある女性たちは、確実に犠牲を強いられることになる。彼女たちは、女性を家の中に閉じこめておこうとする社会的環境の中で、十分な教育も受けず、無力なまま生きなければならない。ガーティーは、“a second mother in the house, a

ministering angel” [13:325-6]と描かれ、自分自身も“womanly wise” [13:223]であることを誇りに思っている。社会が求める女性像に無自覚に従っているのである。彼女はレジー・ワイリーとの、結婚を夢見ているが、彼の家はプロテスタントであり、兄はトリニティー・カレッジに通い、レジーもトリニティー・カレッジに入って医者になろうとしているところを見ると、アイルランド支配者階級の家であり、カトリックの労働者階級の娘である彼女がレジーと結婚することなどもとよりあり得ない。しかも彼女は、彼女の描写の最後に明かされるように、片足が悪く足を引きずって歩いている。

このような状況に置かれたガーティーが、レジーとの結婚が半ば幻想に過ぎないと自覚しつつも、その幻想に浸らざるを得ないのは無理もないことなのかも知れない。

ガーティーの幻想の材料となるのは、ヴィクトリア朝のロマンティックな女性向け大衆小説と女性ファッション雑誌や、ファッション関係の商品広告などだ。ガーティーは、ファッション雑誌や広告に従って身を飾り、自らを女性向け大衆小説のヒロインに仕立てようとする。そして、この挿話の文体も、アメリカの女流作家 Maria Cummins の *The Lamplighter* (1864) [13:633] を始めとする女性向け大衆小説の文体が用いられ、彼女のディスコースがそのような文体の模倣であることが分かる。ガーティーがこの小説のヒロインに夢想の中で我が身を擬えようとするのは、そのヒロイン“Gerty Flint”の名前が、彼女の名前と同じだからだ。この小説のヒロインは、子供の頃迷子になり、「点灯夫」の“Trueman Flint”に助けられ、やがて道徳的で自己犠牲を厭わぬ女性へと成長し、最後は、裕福な実の父親と再会して、金持ちの幼なじみ“Willie Sullivan”と結婚する。当時この小説は大変ポピュラーになり、英国でも出版されベストセラーになった。それは、恐らく、忍耐強く正しい生活を送ったヒロインの苦労がやがて報われると言った教訓的な内容がヴィクトリア朝の価値観と合致していたからだろう。彼女が裕福なレジー・ワイリーとの結婚を夢見る時、この小説が頭にあったと考えらる。

文体によっても示されるこのガーティーが耽る幻想は、過酷な状況に置かれたサルタンの殆ど無意識の現実逃避と見ることが出来るだろう。この第13挿話と前の第12挿話との間には明らかに相関関係があるように思われる。そして、第12挿話で描かれる男たちの世界は、ガーティーの世界にも侵入している。ガーティーの父親は第12挿話で描かれる酒飲みで暴力的な男たちの一人なのである。そして、彼女の父親は、この日も飲酒からくる痛風でディグナムの葬式にも出られず、ガーティーは仕事の遣いにやられている。[13:321-4] ガーティーの父親と第12挿話で描かれるバーニー・キアナンのパブにたむろする男たちとの繋がりが

は、そこでの中心人物である「市民」が、ガーティーの祖父ギルトラップの犬ギャリオーウェン（“grandpapa Giltrap’s lovely dog Garryowen” [13:232-3]）を連れてきていることによっても暗示される。第12挿話とこの第13挿話のディスコースは対照的だが、第13挿話のディスコースは第12挿話のディスコースに対抗するカウンター・ディスコースとはなり得ていない。男たちが支配する社会は、ガーティーをこの社会が要求する女性像に押し込めようとする。そしてガーティーはそれに対抗し、拒絶することは出来ない。ガーティーは、英国の植民地アイルランドの、更にもっとも弱い立場にあるサバルタンなのである。ステーブンがアイルランド社会、とりわけ、カトリシズムが、彼にかくあれと要求する声を拒絶し、アイルランドを離れたのに対し、女性であり弱者であるガーティーにはそうすることも出来ない。

サバルタンとしてのガーティーがアイルランド社会を支配するディスコースに対抗できない最も大きな要因は、彼女がそれに対抗するディスコースを持ち得ていないという点にある。ガーティー自身「十分な教育を受けてさえいれば」（“had she only received the benefit of a good education” [13:100]）と嘆く通り、彼女は当時の殆どの女性たちと同様教育を受けておらず、自らアイルランド社会の支配的なディスコースに対抗するディスコースを築き上げるだけの力がないのである。それ故、ガーティーは「模倣」せざるを得なくなる。彼女がそのロマンティックな世界に浸るのは、アイルランドの支配的なディスコースが要求する過酷な運命とその現実から逃避するためであり、それは自らの声を持ち得ないサバルタンに許されるぎりぎりの抵抗手段であったのかも知れない。

さて、もう一人『ユリシーズ』に詳細に描かれる女性、ブルームの妻モリーについて考えてみよう。先にも述べたように、モリーはポイランとこの日姦通を冒す。また、『ユリシーズ』の最後のエピソードで描かれるモリーの独白も、性的な内容が多いものとなっている。それだけを見ると、モリーと言う女性は極めてセクシュアルな浮気女としか見えないかも知れない。実際、このモリーの描写を女性に対するステレオタイプな見方だと批判するフェミニスト批評もある。しかし、このモリーの声も他の声との対比の中で初めて意味を持つように思われる。

先にも述べたように、当時のアイルランドの支配的言説は、カトリシズムとナショナリズムのディスコースだった。そしてジョイスはそれらから逃れるためアイルランドを去った。モリーの声の意味を考える際には、この両者の声との対比が必要になる。

キリスト教以前の古代宗教は総じて自然崇拜の宗教で、その信仰の対象となるのは母なる大地の女神だった。それはむしろ自然なことで、人間の命の糧となるのは生命を育む大地に他ならなかったからである。この時代の社会は母系制が中

心だったと考えられる。人間が生存し種を存続させるには、子孫を増やさなければならぬが、それには母系制が相応しかつたからだ。様々な男と交わり多くの子供を産んで、しかも多様な遺伝形質の子供を増やすことが種の存続には最適だった。もちろんそこでは女性のセクシュアリティは決して否定されることはない。しかし、やがて人間社会は父系制へと移って行く。キリスト教の出現と父系社会との間には深い繋がりがあるように思える。父系制の社会では、女性は夫以外の男と交わることは許されない。キリスト教が女性のセクシュアリティを抑圧し、貞淑が女性の一番の美德だとするのは、まさに男系社会のディスコースであることを示している。しかし、母性を否定することは出来ないで、女性からセクシュアリティを剥奪し、母性のみの存在となるのが聖母マリアだ。(このあたりの議論は Northrop Frye の *The Great Code: The Bible and Literature* を参考にしてている。) 男系社会はまた男権社会と表裏一体のものだ。男性が権力を握り、女性はガーティーのように、家庭の天使となることを強いられる。

さて、モリーのセクシュアリティは、アイルランドのカトリシズムにとって大きな脅威となったことは想像に難くない。『ユリシーズ』は出版前アメリカの *Little Review* 誌に連載されていた時に既に猥褻罪に問われ発売禁止の憂き目にあうが、アイルランドでは出版後も 1980 年代になる頃まで長らく受け入れられることはなかった。それは、カトリシズムのディスコースに対する強烈なカウンター・ディスコースとなっていたからに他ならない。

モリーは 1870 年、英国領ジブラルタルで生まれる。父親はアイルランド人で、当時英国海軍士官としてジブラルタル要塞に配属されていたブライアン・トウィーデー (Brian Cooper Tweedy)、母親はルニータ・ラレード (Lunita Laredo) である。母ルニータはその名前、また、モリーが「母の血を引いてユダヤ娘みたいな顔をしているから」(“on account of my being jewess looking after my mother” [18:1184-5]) と述べていることから、スペイン系ユダヤ人であったと推測出来る。ジブラルタルはスペインのユダヤ人追放を受けて移住したユダヤ系の住民が非常に多かったことを考えてみても、母親がユダヤ系であったことはまず間違いないだろう。モリーの母親はモリーが幼い頃に死ぬか家を出るかしたようで、正式に結婚していたかどうか不明だ。彼女は少女時代をジブラルタルで育つが、16 歳の時に父親に伴ってダブリンに移り住み、1888 年にブルームと結婚する。

ジブラルタルにいた頃、モリーは恋人をボーア戦争に送り出している。例えば、英国陸軍将校 Gardner について、「南アフリカに行って、あのボーア人に戦争と熱病で殺された。」(“to South Africa where those Boers killed with war and fever” [18:867-8]) と述べ、さらに、「女が世界を支配した方がずっといいわ。女

が互いに殺しあったり、虐殺するのを見ることはないでしょうから。」(“it'd be much better for the world governed by women in it you wouldn't see women going and killing one another and slaughtering.” [18:1434-6]) と述べる。これは、いわば、力によって他者を支配しようとする英国帝国主義や、それに力に対抗しようとするアイルランド・ナショナリズムの男性的な原理に対するカウンター・ディスコースとなっている。

主人公とその妻がユダヤ人もしくはユダヤ人の血を引く人物に設定されていることは、アイルランドが単一民族で成り立っている訳ではないと示唆しており、『ユリシーズ』から聞こえる様々な声はアイルランドの文化や宗教が決して単一でないことを訴えている。『ユリシーズ』のポリフォニックな構造は、偏狭なナショナリズムやカトリシズムへの痛烈な批判となり、所謂「多元文化主義」に見られる多様性を認める価値観を対置させるのである。

先に述べたように、『ユリシーズ』と言う作品には様々な側面があるが、ここでは、この作品が、歴史的・文化的状況の中で、その支配的な言説に対する強烈なカウンター・ディスコースとなっていることを示すに留め、次に漱石の話に移ることにする。

夏目漱石と英文学

実は、漱石と言う作家も、明治維新と言う歴史的・文化的文脈の中で、その波に巻き込まれながらも、それに抵抗しようとしていた作家だと言えると思う。漱石は1867年(慶應3年)に東京で生まれ、年齢は丁度明治の年数と同じになる。まさに、明治と言う時代とともに生まれ、生きた作家だった。

漱石は『文学論』の「序」に「少時好んで漢籍を学びたり」(14『文学論』7)と、漢文学を好み、1881(明治14)年に府立一中から二松学舎に進み漢学を学ぶが、「此の文明開化の世の中に漢学者になつた処で仕方なし(25「落第」162)」と考え、一年余りで退学して大学予備門に入るため成立学舎に入学し、英語を学び始める。この方向転換の背景には恐らく敬愛していた長兄大助の影響があったと思われる。

私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを読んで文学といふものを面白く感じ、自分もやつてみようといふ気がしたので、それを亡くなった兄に話してみると、兄は文学は職業にならない、アツコンプリツシメントに過ぎないものだと云つて寧ろ私を叱つた。

(25「時機が来てゐたんだ — 処女作追懐談」280)

この兄の言葉は当時の世間を代表する言葉だった。文明開化の世は当時のエリートたちに国家に有用な人材となることを求めていたのである。

漱石は、1884（明治17）年、大学予備門に入学し、二級の時に落第を経験するが、それを機に心機一転勉学に励み、以降主席を通すことになる。この時期漱石は建築をやってみようかと思ひ立ち建築科に進もうと考えるが、彼が一目置いていた同級生米山保三郎に反対され、結局英文科に進むことを決心する。漱石はその間の事情を「処女作追懐談」で述べている。そこで、米山は、建築家になったところでどうせ日本では大したものを作ることは出来ない、文学の方が命があると云って、文学をやるように奨めたとある。

こうして漱石は本科第一部（文学）に進み、1890（明治23）年、帝国大学文科大学英文科に入学することになる。漱石は、時代の要請にも応え、且つ、趣味的なところもあると言う理由で建築科にでも進もうかと考えたが、もともと文学を好み、文学者になりたいと言う気持ちがあったからこそ、容易に自説を翻したのだと想像できる。一目置いていたこの友人の言葉は、いわば、文学をやりたいという漱石の本心を正当化し、背中を押したに過ぎないと言えるだろう。然し、それが、少時好んだ漢文学ではなく英文学であったのは、欧化政策をとっていた明治という時代の要請に答え得る有為な人間にならなければならないという意識があったからに他ならない。だが、その英文学は漱石が好んだ漢文学とは全く異質なものだ。漱石は後に『文学論』の「序」で、少時漢文学を好み、英文学もそのようなものだと思って始めたが、卒業してみると「英文学に欺かれたるが如き不安」がある、と云っている。

漱石は、大学卒業後大学院を経て、この「不安の念」を抱いたまま、1895（明治28）年愛媛県尋常中学校（松山中学）に奉職、翌年には熊本第五高等学校に転任し、さらに、1900（明治33）年に文部省の命を受けて二年間英国に留学する。そして、この二年間の英国留学は、漱石にとって極めて困難なものであったと同時に、彼が文学と正面から向かい合う契機ともなった。漱石は『文学論』の序文で、「かいつまんで申しますと、学力は同程度として、英文学は漢文学にこれ程好悪が分かれるのは、両者が全く異質なものだからに他ならない。そこで文学とは何かと言う根本的な問題を解釈してみよう」と決心したと云っている。こうして『文学論』が書かれることになる。その詳細についてはここでは触れることは出来ないが、後に「私の個人主義」の中で、『文学論』に取り掛かった頃を振り返り次のように述べている。

此時私は始めて文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作
り上げるより外に、私を救ふ道はないと悟つたのです。今迄は全く他人本位

で、根のない萍のやうに、其所いらをでたらめに漂つてゐたから、駄目であつたといふ事に漸く気付いたのです。(16「私の個人主義」593)

そして、「私は此自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。」(同 595)と、当時の心境を説明している。ここで興味深いのは、西洋人の受け売りを拒否した漱石が、個人主義や科学や哲学的思考と言った、西洋文明の根幹に関わる概念を、身をもって理解し実践しようとしていたことである。ある意味で、漱石とは、西洋文明の根幹を最もよく理解し、その影響を受けた人間であつたと言える。

しかし、ことはそれ程容易ではなかつた筈だ。漱石には、その寄つて立つべき「自己」がそれ程強固なものとは考えられなかつたからである。次の引用は「文芸の哲学的基礎」の一節である。

すると、かうですな。此世界には私と云ふものがありまして、貴方方と云ふものがありまして、さうして広い空間の中に居りまして、此空間の中で御互に芝居をしまして、此芝居が時間の経過で推移して、此推移が因果の法則で纏められて居る。と云ふのでせう。そこで夫には先づ私と云ふものがあると見なければならぬ、貴方方があると見なければならぬ。空間と云ふものがあると見なければならぬ。時間と云ふものがあると見なければならぬ。又因果の法則と云ふものがあつて、吾人を支配して居ると見なければならぬ。是は誰も疑ふものはあるまい。私もさう思ふ。

所が能く考へてみると、それが甚だ怪しい。余程怪しい。通俗には誰もさう考へて居る。私も通俗にさう考へてゐる。然し退いて不通俗に考へて見るとそれが頗る可笑しい。どうもさうでないらしい。何故かと云ふと元来此私と云ふ — かうしてフロックコートを着て高襟をつけて、髭を生やして儼然と存在して居るかの如くにみえる、此私の正体が甚だ怪しいものであります。フロックも高襟も目に見える、手に触れると云ふ迄で自分でないには極つてゐる。此手、此足、痒いときには搔き、痛いときには撫でる此身体が私かといふと、さうも行かない。痒い痛いと申す感じはある。撫でる搔くと云ふ心持ちはある。然し夫より以外に何も無い。あるものは手でも足でもない。便宜の爲手と名づけ足と名づける意識現象と、痛い痒いと云ふ意識現象であります。要するに意識はある。又意識すると云ふ働きはある。是丈けは慥であります、是以上は証明する事は出来ないが、是丈けは証明する必要もない位に炳乎として争ふ可からざる事実であります。してみると普通に私と称して居るのは客観的に世の中に実在して居るものではなくして、只意識の連続

して行くものに便宜上私と云ふ名を与へたのであります。(16「文芸の哲学的基礎」68-70)

これを見ると到底当時の日本人の見解とは思えない。このような考え方は、英国20世紀初頭の心理主義小説やモダニズム小説に見られる、人間の本質を自我、或いは、意識と捉える見方と極めて近いように見える。漱石は、『文学論』を執筆するにあたり、様々な分野の本を読んでいるが、その中には『心理学』を書いたウィリアム・ジェイムズや、『時間と自由』を書いた、アンリ・ベルクソンの著作も含まれている。ジェイムズやベルクソンの思想は英国の心理主義小説やモダニズム小説に強い影響を与えたが、漱石も同じようにその影響を受けたと考えることが出来る。ジョーゼフ・コンラッドやヘンリー・ジェイムズの小説や当時の様々な書籍を読み、ヨーロッパの知の潮流を敏感に感じ取っていた漱石がそのような境地に達していたとしても不思議はない。しかし、それは同時に、この時代の作家が背負っていた、「孤独」とか「自我の不安」と言った問題を漱石に課した。例えば、初期の作品『坑夫』には早くもそのような問題意識の萌芽が見られる。主人公の坑夫は「暗い所へ行きたい」(5『坑夫』9)と繰り返し述べ、炭鉱の奥深くへと降下して行くが、それは自我の内部の暗闇を探る旅でもあった。ここでは明らかにコンラッドの『闇の奥』の影響が窺える。その主人公マーロウはコンゴ川を上流へと遡って行くが、それは同時に人間の心の暗闇へと遡る旅でもあった。漱石はやがて、第二の三部作『彼岸過迄』、『行人』、『心』で自我と孤独の問題を探求することになる。

一方、『草枕』では、東洋の無我の境地が描かれる。主人公は次のように述べる。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き々々した上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。(中略) ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか浮世の勤工場にあるものだけで用を弁じて居る。(中略) うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。(3『草枕』9-10)

漱石の中には、このような東洋的な漢文学の世界に見られる無我の境地に対する嗜好或いは憧れのようなものがあったのだが、東京帝国大学教授の地位を提示さ

れながらも、朝日新聞に入社し小説家としての道を歩み始めた漱石は、

只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅少な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではいけない。・・・文学者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相遠かる様な小天地ばかりに居ればそれぎりだが大きな世界に出れば只愉快を得る為めだ杯とは云ふて居られぬ進んで苦痛を求める為めでなくてはなるまい。(22「書簡」605-6)

と述べ、「死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。」(同 606) と言い、実際そのような姿勢で小説に取り組んだのである。しかし、この漢文学の世界への憧憬はその後も作品のここかしこに現れる。例えば、『それから』の代助が三千代と二人だけの生活に夢見た「欲得」も「利害」もなく、「自己を圧迫する道徳」もない、「雲の様な自由と、水の如き自然」(6『それから』271)のある世界とは、紛れもなく、この漢文学的世界である。だがそれは、代助の言う明治の「個人の自由と情実を毫も斟酌して呉れない器械の様な社会」(同 286)とは決して両立し得ない世界だった。『門』の宗助も、ふと歯医者で雑誌の中に見つけた漢詩を読んで次のような感慨を抱く。

斯んな景色と同じ様な心持ちになれば、人間も嬉しからうと、ひよつと心が動いたのである。・・・只この二句が雑誌を置いた後でも、しきりに彼の頭の中を徘徊した。彼の生活は実際この四五年來斯ういふ景色に出逢つた事がなかつたのである。(6『門』414)

そして宗助は最後の場面で、禪寺の山門の前に佇みながら、どうしても中に入ることが出来ない。

彼は後を顧みた。さうして到底又元の路へ引き返す勇気を有たなかつた。彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時迄も展望を遮つてゐた。彼は門を通る人ではなかつた。また門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。(6『門』599)

また、『行人』の一郎は、電車で老婆の「ぼかんとした顔」を見て、「何も考えていない、全く落ち着き払ったその顔が、大変家気高くみえる」(8『行人』398)

と言う。現代の、そして西洋の洗礼を受けた宗助や一郎は、無我の境地に強い憧憬を覚えながら、その境地に入ることは決して出来ないのである。

漱石は、胃潰瘍を患って長与病院に入院するが、そこを一旦退院する1910（明治43）年7月31日に「十年来」作ったことが殆どなかった漢詩を書いた旨が、同日の日記に記載されている。（20「日記・断片」178）その直後、漱石は静養のため修善寺に転地し、そこで、所謂、「修善寺の大患」に見舞われ、危うく命を落としそうになる。九死に一生を得た漱石は、その後の療養中にしきりと漢詩を作るようになる。そして、健康を取り戻し小説の執筆を再開した後も、漢詩を作り続けている。

漱石は、明治と言う時代のエリートとして、西洋の思想・文学を学び深く理解するが、一方、少時より好んでいた漢文学の世界にも引き付けられ続けるのである。このように二つの世界に引き裂かれざるを得なかったのは、明治と言う時代に生きた知識人の宿命だったのかも知れない。それでは、漱石はその明治と言う時代をどのように見ていたのだろうか。

漱石と明治

漱石は自分の生きた明治という時代に、英文学に対するのと同様に違和感を抱き、様々な形で批判している。例えば、「現代日本の開化」の中で、日本の開化は、西欧のそれが内部から自然に起こった「内発的」なものであるのに対し、外から強制された「外発的」なものであると述べ（16「現代日本の開化」430）、そして、そのような「開化」は「皮相上滑り」（同437）にならざるを得ず、その影響を受ける国民はどこかに「空虚の感」（同436）を持たざるを得ないと断じている。

このような認識は漱石の小説の随所に窺える。『三四郎』では、「明治の思想は西洋の歴史にあらはれた三百年の活動を四十年で繰り返してゐる。」（5『三四郎』294）と述べられる。そして広田先生は、古い寺と西洋館の並んでいるのを見て、「時代錯誤だ。日本の物質界も精神界も此通りだ。」（同354）と述べ、日本は「亡びるね」（同292）と批評する。旧態然とした熊本から東京に出て来た三四郎は、「三つの世界が出来た」と言う。一つは古い時代に属する平穏な熊本の田舎であり、二つ目は大学に代表される学問の世界、そしてもう一つは、動揺する東京に代表される新しい文明開化の社会である。三四郎は、自分はこの新しい社会に属すべき人間だと考えながら、「それにも拘はらず、円満の発達を冀ふべき筈の世界が、却つて自らを束縛して、自分が自由に入出すべき通路を塞いでゐる。」（同365）と、その世界に素直に入って行けぬ違和感のようなものを感じざるを得ない。『それから』では、この違和感とでも言うべきもののために、主人公代助は、大学を卒業した後も、そのような社会に出て働くことを拒み、「高等遊民」としての生活

を送っている。代助は自分が働かぬ理由を次のように述べている。

何故働かないつて、そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の中が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本対西洋の關係が駄目だから働かないのだ。第一、日本程借金を拵らへて、貧乏震ひをしてゐる国はありやしない。此借金が君、何時になつたら返せると思ふか。そりや外債位は返せるだらう。けれども、それ許りが借金ぢやありやしない。日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。それでゐて、一等国を以て任じてゐる。さうして、無理にも一等国の仲間入をしようとする。だから、あらゆる方面に向つて、奥行を削つて、一等国丈の間口を張つちまつた。なまじい張れるから、なほ悲惨なものだ。牛と競争をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。其影響はみんな我々個人の上に反射してゐるから見給へ。斯う西洋の圧迫を受けてゐる国民は、頭に余裕がないから、碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使はれるから、揃つて神経衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と、身体の衰弱とは不幸にして伴つてゐる。のみならず、道德の敗退も一所に来てゐる。日本国中何所を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ。其間に立つて僕一人が、何を為たつて、仕様がなさい。(6『それから』101-2)

このように、西洋の上っ面のみを移入しようとした明治の欧化政策と、その結果生まれた明治の社会を漱石は痛烈に批判した。漱石は漢学を好みながらも、エリートとして、個人主義等、いわば、西洋の精神を身をもって体得した。そして、西洋の上っ面のみを移入しようとしていた明治の社会を、小説を書くことを通して批判し続けた作家だった。

漱石と現代

「和魂洋才」と言う言葉がある。西洋は技術に優れているが、精神は日本が優れている。それ故、西洋からは技術だけを取り入れればよいと云う考え方である。実際、この時代の日本が取り入れたのは生産技術と近代的な軍隊だった。大日本帝国憲法が作られたが、それは権力者の横暴から国民を守ると言う理念を持った近代憲法とはかけ離れたもので、憲法の形だけを取り入れた、国民を臣民として権力者が支配する道具に過ぎなかった。そして、「富国強兵」と言うスローガンはまさにこの明治と言う時代を端的に表している。産業を興して国を富ませ、

軍備を強化して帝国主義の道を歩んで行くのである。明治以降の歴史を振り返ると、それはまさに戦争と侵略の歴史だった。日清戦争、日露戦争、日中戦争、太平洋戦争と相次いで戦争を起し、台湾、朝鮮半島、中国そして東南アジア諸国へと侵略を進めて行った。明治維新で日本が取り入れたのはまさに帝国主義と言う西洋の悪しき側面だったと言えるのかも知れない。

政治の世界では、天皇が元首となり、やがて神格化され国家神道が出来上がる。英語では明治維新を“Meiji Restoration”と訳すが、ある意味、維新と言うより「復古」と言う方が正しいようにも思える。まるで、太古の祭政一致の時代に戻ったようなものだからだ。靖国神社なる、人を戦争へと駆り立てる装置も作られたが、それを未だに政治家が参拝しているのだから、日本は今もさほど明治時代と変わっていないのかも知れない。

漱石が、日本は西洋の上っ面だけを取り入れたと看破したように、日本の西洋文化の移入は明治以降もその感を免れない。「富国強兵」と言う代わりに、「アベノミクス・安法制」と言い換えているに過ぎないように思われる。現政権を取っている日本の保守党は、未だに家父長制を肯定し、軍国主義的な考え方が幅を利かせ、人権やジェンダーに関する意識も低いように思われる。また、巷では、ヘイトスピーチや性的マイナリティーに対する差別など、前近代的な振る舞いが多数見られる。「国境なき記者団」による「報道の自由に関する国際ランキング」によれば、2022年度、日本は先進国では圧倒的に低い71位だった。また、「神道政治連盟国会議員懇談会」なる「神道政治連盟」を支援する組織が存在し、安倍元首相が会長を務めていた。「神道政治連盟」は政治に国家神道の精神を反映させようとする組織で、その主張は、新憲法制定、靖国神社の英霊にたいする国家儀礼の確立、天皇男系維持、東京裁判の否定、太平洋戦争をアジア解放の戦争と位置付ける、夫婦別姓制度の成立阻止、教育勅語の普及、など、極めて復古的な考えを持った組織で、それを支援しようと言うのが「国会議員懇談会」であり、政権政党の約300人もの議員が加盟している。先日は、LGBTは依存症であり病気だと言うパンフレットを配布したことが問題になった。「日本会議」なるものもあり、これにも「日本会議国会議員懇談会」と言う政権政党の多くの議員が参加する支援組織がある。「日本会議」も「神道政治連盟」と深く関わり、その主張も、自虐的歴史観の修正、人権偏重教育・ジェンダーフリー教育の是正、憲法改正などである。何だか日本は明治時代から何も変わっていないように思える。日本が仮初にも近代国家の体をなしているのは、ただただ日本国憲法のお陰だと思っているが、その憲法も次第になし崩しにされ、何時改正されるか分からないような状況にある。漱石の批判が今も尚有効であるように思える所以である。漱石の批判は残念ながら今も生きているように思えてならない。

おわりに

ここまで歴史の中で苦闘した二人の作家について簡単に述べて来た。作家のみならず人間誰しもその生きた時代の歴史に制約を受けるのは当然なのだろうが、ジョイスも漱石も彼らが置かれた歴史的状况に正面から立ち向かい、戦い続けた作家だったと言えるだろう。そして、彼らの小説は現代に生きる我々にも様々な示唆を与えてくれる。

文学には様々な側面があるが、私にとって、文学の最も本質的な部分とは、その時代の支配的な言説をしっかりと検証し、それを受け入れられない場合には、断固として抵抗し、それに対抗する言説を作り上げることである。文学とは抵抗の言語なのだ。最近よく思い浮かべるディラン・トマスの詩の一節がある。

Do not go gentle into that good night,
Old age should burn and rave at close of day;
Rage, rage against the dying of the light.

この詩は、単に死に抵抗すると言うことでなく、死ぬ瞬間まで、世界に蔓延る不正、戦争、差別、貧困、格差と言ったものに、怒り抵抗し続けろと言っているように感じられる。私も老いの身ながら、最後まで言葉を鍛え上げ、怒り抵抗して行きたいと考える今日この頃である。

タイトルに「文学論」などという大げさな表現を使って仕舞ったが、このような意味で言えば、拙劣にして取るに足らないものかも知れないが、私のささやかな「文学論」と言えるのかも知れない。

県立広島大学名誉教授

Works Cited

(*Ulysses* からの引用は、挿話番号・行数、漱石からの引用は岩波書店・平成版『夏目漱石全集』により、巻数・タイトル・ページ数で示す。)

Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man: Authoritative Text, Backgrounds and Context, Criticism*. Edited by John Paul Riquelme, W.W. Norton, 2007.

一. *Ulysses*. Edited by Hans Walter Gabler et. al., 1986

夏目漱石『夏目漱石全集』岩波書店、1996年